新潮文庫
ヴァージン・ロード（上）
昭和６０年６月２５日　発行
昭和６３年１０月２５日　１５刷

ヴァージン・ロード（下）
昭和６０年６月２５日　発行
昭和６１年５月３０日　８刷

著者　赤川次郎
発行所　株式会社新潮社

（私の手持ちの本の奥付を書きました）

感想と理由

赤川次郎氏の著作は、各話完結であっても、シリーズが長く、作品数は膨大だ。
氏の著作は読みたいが、人気のあるシリーズは手をこまねく、という時期があった。
そして、読みきり短編集や、シリーズ作品以外を、手に取っていた。

赤川次郎氏の作品のヒロインには、明るくてハキハキした女性が多い。
また、家族構成で、肉親が欠けているキャラクターも多い。
ヴァージン・ロードの主人公・叶典子は、正反対と言える。

２９歳の中堅ＯＬで、郷里の福岡を遠く離れた東京で、一人暮らし。
同じく上京してサラリーマンの弟と、福岡でＯＬをしている妹を持つ。
両親からは、子供の頃から「お姉ちゃんだから」と、弟妹の面倒を見るように言われ、
世話を焼きながらも、おっとりした人柄から、婚期を逃しつつある・・・
時に寂しさを感じる年齢ながらも、自分自身は２０台半ばの頃から変わっていないつもりが、
世間の目は変わりつつある、そんな年代。

古い作品ではあるが（白黒テレビからカラーテレビへの移行、など出てくる）、
登場人物の会社や家族との日常や、結婚観、人生観は、いま読んでもまったく褪せていない。
恋愛結婚したいけれど、出会いがない毎日の繰り返しで、
親からはお見合い話が舞い込むものの、お見合い→結婚というコースには、踏ん切りがつかない・・・
そんな中、彼女は、世話焼きのアパートの大家さんから、ある男性とのお見合い話をもちかけられる。
妻と離婚後、苦労して娘を育てている男性・・・２９歳の女性なら、釣り合うという他人の目。
いままで代わり映えしない毎日だったが、唐突にいろいろなことが動き出す。
典子のお見合い、
弟の結婚話、
典子を慕う謎の匿名の手紙、
同僚の結婚、
新たなお見合いと、結婚相談所の申し込み・・・

文中、典子は幾度も結婚について、考えている。

その後は—もう洋子も人妻である。そうそう誘い出すわけにもいかない。
女は損だ。子供でも生まれれば、何年間かは気ままに出歩くこともできないのだから。
それでも女は結婚したがる。なぜだろう。みんながみんなではなくとも、大部分の女性が、当然のように結婚して行く。

そこには、ただ働くのに疲れたひとが、楽をしたいといった、よく週刊誌などでからかわれているような虫のよさ以上の「何か」があるはず。
だが、典子自身、結婚しようと心に決めた今となっても、その「何か」を、はっきりと見定めることは出来なかった。下巻P17

結婚後の女性は、異性どころか同性の友人であっても、交際に制限がかかる。
妊娠しようものなら、数年間は、社会と隔絶した環境になることも、めずらしくない。
「マリッジ・ブルー」「マタニティー・ブルー」「産後うつ」
今後のことを思い悩み、体調を崩すこともある・・・それでも、結婚や子供を望む女性が大半だ。

主人公・典子を含め、登場人物に突飛な人間は見当たらず、
どこかで見たような、聞いたような、そういった人物たちが、それぞれの人生を生きている。
だからこそ、古い作品ではあっても（昭和５８年）古さを感じさせないドラマだ。

いつか子供に読んでほしい。
さまざまな人に出会うだろう、さまざまな経験をするだろう。
人生のうちで、結婚とはなにか、どのような位置を占めているのか。
家族になること、家族を作ること、共に手をとり生きていくこと、考えてほしい。

そして、この作品の著者が、当時３５歳の男性であった、ということ。
２９歳のOLを主人公として、結婚や恋愛を、女性が共感する文章が書けるのは、
人間に対しての観察力、想像力、それらを感じ取ってほしい。
気遣いや思いやりは、経験から学ぶことが多いが、想像力も助けになる。

そういった諸々のことを知ってほしいから、いつか、この小説を読んでほしい。
そして、親子で結婚について語り合う日がくるのを、楽しみにしている。